

# 中学生の心理

# 僕わかつてる

## 全五巻

製作 山崎英治  
原作 波多野勤子  
脚本 青木隆夫  
監督 山崎英治  
撮影 高橋正樹  
美術 江崎英樹  
音楽 丸山圭三郎  
録音 丸山圭三郎

キャスト  
一平 山本 圭  
なほ子 小森 珠  
良太 布 施 滋  
三香(父) 高 杉 三  
みや子(母) 高 杉 三  
次郎君(一平の友人) 後 藤 久  
泉 君( ) 後 藤 久  
中村君( ) 水 谷 克  
友だちA( ) 杉 岡 彦  
友だちB( ) 下 河 原 金  
友だちC( ) 下 河 原 金

### 解説

母親たちが、子どもの教育で一番困っているのは、中学生だ。中学生の頃を無事に過ごさせると、あとはそれほど心配ないといわれる。中学生時代は、大事な精神的養育期だともいわれる。しつけに苦労していられる世のお母さん方に提供するための企画し、波多野勤子さんの名著「中学生の心理」を原作とし、脚本山崎英治、監督青木隆夫、「お姉さんといっしょ」のスタッフで完成した。

主人公の一平は、成瀬中学三年生山本圭君は、映画監督山本薩夫氏の甥で、お父さんは建築家、もちろん映画出演ははじめてであるが、「お姉さんといっしょ」のスタッフのような各演技でスタッフをうならせた。

青山監督は、この山本君を生かして、今の中学生の気持ちに耳を傾けながら、記録映画のつもりでこのドラマを撮った、と語っている。

従って、教訓のいた結論はわざとさけておいて、自我に目覚める反抗期の中学生の心理と行動は、生き生きと描かれて、胸を打つものがあるとおもう。まず彼等を知ることがオマケで、どうしたらいいかというところは簡単にはいえないが、親たちが中学生を理解しようとつとめ、見守ってやる気持ちになれば、答はいろいろと出てくるにちがいない。

### ものがたり

一平君は、中学一年生の妹なほ子と小さい弟、良太の三人兄弟である。

山登りの好きな一平君は夜トロンに入る代りに、時々キャン・プまがいのスリッピング・バックの中で一夜をすごし、その気分にはたるとである。

母の「御飯ですよ！」の声に眼をさました一平君が始めての言葉は「あ、腹へったー」である。

顔を洗わずに食卓についた一平君は、もう学校へ出かける時間である。

学校へ通っている子供を持つ家庭では、何処の家もそうだが、朝の一時は本当に戦争の森である。然かも中学生ともなれば、なかなか親の思う様になつてくれず、両親からすれば悩みの種である。

特に一平君は食いざかりで、毎月きまつてもう月給は来月分もすでにもらつてパン代に化けているのである。

学校の友だちとは山行きの相談がまじり、その費用を捻出するべく、母親に妹の家庭教師をやると相談をもちかける。だが当の一平君は自分の宿題も友達のをみせてもらっていると言う仕末なのである。

ある日、一平君は腹をへらして帰宅してみると、居る筈の母親は不在。何かおやつでもと何処をさがしても見当たらない。隣家から帰った母親とけんかになる。

さうなるともう妹の家庭教師なんかすつかり忘れていたのだ。

ある日曜日、一平君の家へ友人が大勢遊びに来て、たまたま女性の同題で意見がぶつとうし、大騒ぎとなる。

母親は一平の友達を知ろうと子供部屋へお茶や菓子をはこんでくるが、一平も友達もかたくなつて、そ、くさと帰って行く。

どうも、自分等の部屋へ然かも友達かきていた時親が顔を出したりするのが、友達にはつかしいらしい。

又、親の都合のいい時は大人あつかい

### 生かす

今度主役は圭ちゃんと言う素晴らしい新人が見つかると言う幸運なスタートを切りました。中学三年で勿論映画は始めて、でも各監督山本薩夫氏の甥さんだから、無難は一流なのでしょう。

圭ちゃんが現われてから、僕の仕事は、圭ちゃんにあわせて一切の演出プランを作り直すことに集中しました。大体筋のいい筋のない、日常生話のスケッチのような映画ですから、圭ちゃんがフィルムの上で生々と動いてくれる事だけがこの映画の生命だと思つたからです。この作業はお母さん役の高杉さん始め、皆さんの支持で最後まで気持ちよく進進しました。圭ちゃん個性を一杯に発揮してのびのびやってくれましたし、高杉さんも流石はベテラン、誰にも共感出来る典型的な母親を創造して下さいました。

この映画の持つ重大な使命を、何とか果すことが出来るようにと、それだけが僕の願です。

(裏面へつづく)

製作 桜映画社



思つたこと

まず最初に思つた事は、大変……というよりもめんどくさいと思ひました。装置照明、演技、and (そして) 撮影とそれが全部うまくよくないとかんとくさんの口から「OK——」の言葉は出て来ません。その連続です。「CUT」「OK」「CUT」「OK」とそれからえんの下の力持ちの太鼓には驚きました。これは本当に大変だと思ひました。やつぱり好きでないと思ひます。一番うれしかった事は撮影が終つた時です。あんなうれしさはそうさにはないと思ひました。

映画を作る事は協同生活のようなものです。一人でも自分勝手の人がいればだめだという事を感じました。でも本当にでてみて良かったと思ひます。

お母さん 吉岡 杉 泰 恵 子

ほのぼのとした気持ちです

一平 時速 三十五キロ

なほ子 〃 二十八キロ

良太 〃 十八キロ

お母さん 〃 二十五キロ

お父さん 〃 〃

一平ちゃん!! 十キロ遅いけど、お母さんだつて走つてんのよ。一寸待つてよ。そんなに早く走つちや危いわよ。お母さんと一緒に走つて!! お父さん何してるの。早くく。

こんな感じの映画が出来上つたように思ひます。

世の中には、もつと速度もまちく。方向もバラく。そして事故続出の親と子の何と多いことでしょう。

誰だつて事故は御免です。でも親子の信頼助け合いが、少しでも事故を少くし、そして小さくするでしょう。私も子供から信頼される母親になりたい。それにはやはり速度を落さず長い人生コースを走りつづけなければなりません。

あのお母さんを作り上げるのに、もつともつと青山監督と話し合う時間が欲しかつたのですが、私にはあんなお母さんのイメージが浮んで来たのです。そして出来るだけ芝居をしなくないと思ひました。芝居が必要なら当然青山監督から御注意が……と、平気な気持ちでやりました。青山先生は、私ばかりでなく子供達をものびくとした気持ちのまゝ、ひっぱつて下さいました。完成して日もたつのに、今でもほのぼとした気持ちです。

青山先生。良いお仕事が出来て、本当に有難うございました。青山先生のお蔭だと思つております。

黒白五巻 四七三米

上映時間 四三分

価格